

3

vol.39

宮城県内外の  
生活支援コーディネーターと  
協議体の取り組みを発信

## 令和4年度

## 宮城県生活支援コーディネーター養成研修を開催

本年度の宮城県生活支援コーディネーター養成研修の2コース(各3回)を開催しました。

生活支援コーディネーターや初任の行政担当者等を対象とする【地域づくり推進コース(基本コース)】には58人の申し込みがあり、生活支援コーディネーターと協議体の役割や、住民と専門職が協働する意義について学びました。

また、行政担当者や中堅の生活支援コーディネーター等を対象とする【現状分析・課題解決コース(実践コース)】には61人の申し込みがありました。自分のまちの現状を調べて地域づくりを考える課題が出され、演習を通じて意見交換をしながら、受講者が地域づくりを進めるための視点をブラッシュアップする機会となりました。

両コースとも2回はオンライン開催となりましたが、3回目は対面での集合研修で開催。受講者のアンケートには、「生活支援コーディネーターの役割を再確認できた」「演習でたくさんの意見を聞くことができ、参考になった」などの声が寄せられました。

## 今後の予定

## 【全体研修】

## 〈地域包括ケアの推進と地域支え合いの在り方〉

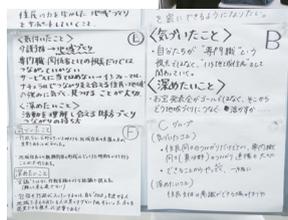
対象：関心のある方はどなたでもご参加いただけます。自治体を通じて参加をお申し込みください。

日時：2023年2月27日(月) 10:00~16:00

会場：フォレスト仙台(仙台市青葉区柏木1-2-45)



10月28日に対面研修で開催した【地域づくり推進コース】では、休憩時間も名刺交換や情報交換を楽しむ姿が見られた



## 柴田町

【しばたまち】人口3万7037人、1万6222世帯、高齢化率30.8%（2022年8月末）。町域は42行政区、6小学校区、3中学校区で構成、中学校区を第2層圏域とする。生活支援コーディネーターは町社会福祉協議会に第1層1人、第2層2人を配置（第2層の定数は3人※2022年9月時点で1人欠員）。協議体は第1層に設置し、事務局は生活支援体制整備事業を所管する町福祉課が担当。同課、地域包括支援センター（2か所）、町社協、生活支援コーディネーターが月1回「5者会議」を開き情報共有と連携を図る。

# 地域共生目指す 「みんなの美術館」柴田町

おおばみよこ  
大庭三余子さん

生活支援コーディネーターの大庭三余子さん（みんなの美術館で）



## 属性問わない交流の場に

「すてきなものに感動する気持ちは、世代や障害のあるなしに関係なく共有できます」

そう指摘するのは、柴田町社会福祉協議会の第1層生活支援コーディネーター大庭三余子さん。2020年4月にコーディネーターに着任し、まず取り組んだ一つが、アート・クラフト作品の展示ギャラリー開設だった。

ギャラリーは、町社協が事務所を置く町地域福祉センターのロビーの一角に、「みんなの美術館」の名称で同年6月オープン。第1回の企画展は、「とっておき造形教室作品展」と銘打ち、町内のアート教室に通う知的障害

のある子どもたちの作品を展示した。

企画展の期間は原則として1か月。基本的に個展は行わず、複数の個人または団体による合同展に限る。開催回数は2022年9月時点で24回に達している。

内容を見ると、初年度は「とっておき」のほか、子ども、高齢者、障害者の各個人・団体の合同展と、これに町図書館の蔵書や町文化協会の会員作品を組み合わせたコラボレーション展も。たとえば、「子どもの心のケアハウス」（不登校傾向のある児童生徒が利用）と精神障害を抱える色鉛筆画家の合同展や、ハロウィンをテーマにした町内各地区の放課後児童クラブの作品展と町図書館所蔵の絵本展のコラボ、県立船岡支援学校（主に肢体不自由の児童生徒が通う）と町立槻木中学校学習支援室（特別支援学級）および町文化協会の3者合同展などを開催している。

「アートやクラフトには、感動の共有を通して地域共生を促す力があります。その力を最大限引き出すような企画を心掛けています」

オーストラリア、イギリスからそれぞれ町に移住した写真家と造形作家の合同展も開いた。大庭さんの目指す「共生」には当然のように町在住外国人も含まれる。

これまで出展した人の多くが、「作品を見てもらえてうれしい」「がんば

る気力がわいた」などと喜びの声をあげている。鑑賞者からは、「すばらしい作品に感動した」だけでなく、「見に来た人や案内してくれた人との会話も楽しめた」といった感想が聞かれる。「コロナでひきこもりがちだったが、外出して人と会える機会になった」との評価は双方から出ている。

展示や鑑賞によって生じる感動、共感、憧れや興味関心、自信と情熱。それらが引き金となって育まれる、他者との新たな関わり——美術館は属性を問わない交流とつながりづくり、生きがいづくりの場となる。

企画展を自当てに、極めて幅広い層の住民が町地域福祉センターに足を運ぶようになっていく。従来は生活上の困難を抱えた人、ミニデイスービスの利用者、民生・児童委員、自治会や老人クラブの役員、ボランティアなどに限られていた。

開設2年目の2021年度は、共生の理念を保ちつつ「地域で活躍する高齢者」の紹介にも重点を置いた。

9月の老人月間に合わせた町老人クラブ連合会の作品展は毎年恒例だが、これに加え、高齢世代のアート・クラフト系サロンの合同展や手工芸の得意なシルバー人材センター登録者の作品展、学校支援ボランティアや観光ガイドボランティア（いずれも高齢者が多い）の活動を紹介する写真展などを開いた。



職場体験で町社協に来た中学生に展示作品の説明をする、町老人クラブ連合会の大槻尚之会長(2022年9月14日)



写真家ポール・ナッシュン(右端)と造形作家カルロス・デアさん(左から2人目)の合同展(2020年12月1日、それぞれ夫婦で来場)※写真提供:大庭三余子さん

## 困りごとから「こけし展」

2022年度も同様の方針で企画展が開かれているが、そのなかで異彩を放つのが6月開催の「民芸特集こけし展」だ。町内のコレクターの協力を得て東北6県の主要なこけしを展示、一部は「ご自由にお持ち帰りください」と無償譲渡の対象にした。これが反響を呼ぶ。詰めかけた愛好者がこけしを持ち帰るだけでなく、逆に「譲りたい」と収集品を持ち込む人も現れた。

こけし展の発端は、地域包括支援センターに「老親のこけしコレクション」の処分が困っているとの相談が寄せられたこと。大庭さんはこの件を、生活支援体制整備事業に関する月1回の「5者会議」(2頁上段の囲み記事参照)で知る。「同じような困りごとは少なくないはず」と、コレクターを訪ねるなどして収集品の処分についての情報を集めた。その過程で、こけし展を思いつく。

「東北の伝統工芸、こけしをもっと深く知ると同時に、収集品の活用や処分について考えるきっかけになれば」



放課後児童クラブのハロウィン作品展。自分やきょうだいの作品を見に来た子どもたち(2020年10月30日)※写真提供:大庭三余子さん

ユニークで多彩な企画展で注目を集め、美術館の知名度は徐々に上昇。大庭さんが出展者を探すだけでなく、自ら展示を希望する団体も出てきている。

美術館がオープンした2020年6月は、コロナの第1波から第2波にかけての時期だった。当時、町内各地区のサロンやサークルは軒並み休止。一方、少人数のアート・クラフト系団体の一部は、感染防止に配慮しつつ活動を継続していた。大庭さんはそうした団体に美術館での作品展示を働きかけた。それは、コロナ下でも持続可能な活動に光を当てることでもあった。

今後について大庭さんは、「コロナの状況にもよりますが、出展者が作品や活動を来場者に説明する『ギャラリートーク』や、作品づくりを体験するワークショップを催すなどして、積極的に交流を仕掛けていきたい」と意気込む。

ところで、美術館として使っているロビーの一角(約7×3メートル)は、かつて介護用品の展示コーナーだった。2019年10月の台風19号豪雨で浸水し、介護用品は撤去。空いたスペースを大庭さんがギャラリィに生まれ変わらせた。

「ちょっとしたスペースと、作品が映える見せ方の工夫で、ギャラリィはどこでも誰でもできます。地区の集会所や公民館にも『みんなの美術館』が広まるといいですね」

大庭さんは大河原町出身、白石市在住の63歳。1990年、旧仙南地方社会福祉協議会に入職。2005年、同社協議会に伴い柴田町社協へ。ボランティアコーディネーターなどを経て現職。趣味は旅行、読書、学生時代からたしなむ茶道と華道。「感動する気持ちを忘れない」をモットーとする。

アートやクラフトは情熱から生まれ、感動を広げる。誰もが暮らしやすい地域づくりも同じようなもの。まず人の心が動いて熱を帯びるところからスタートし、共感する人びとがつながり、進んでいく。

利

## 栗原市で栗駒地区と鶯沢地区合同の「お宝発表会」を開催 〈8月8日〉

栗原市社会福祉協議会では、高齢になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けるために、つながりを継続することの大切さについて理解を深める「お宝発表会」を、8月8日に栗駒地区と鶯沢地区合同で開催しました。栗駒地区と鶯沢地区の2層協議体が運営に携わり、地域活動団体や民生委員、一般住民など、およそ150人の参加がありました。

開会あいさつでは、市社協栗駒支部支部長の五十嵐慶一さんが、初めて2地区合同のお宝発表会の開催に至った経緯や、これを機に地区の垣根を越えて地域福祉の向上を図っていきたいとの抱負を話しました。

続く基調講演では、滝ノ原地区社協会長の佐藤博泰さんが、介護給付と保険料の実情や、生活支援体制整備事業について説明。定年後に趣味で始めた自身のパン工房が、地域の交流の場や居場所になり、支え合いにつながっていることを実感していると語り、活動を継続することが健康寿命を延ばすことにもなるというお話もありました。

その後、各地区の2層生活支援コーディネーターから、地域の3団体の実践紹介がありました。活動団体からは、「作品を褒められると嬉しい。それが続ける意欲になる」

「仲間が送迎してくれるから90歳代でも参加できる。活動が楽しいからこそ長生きできていると思う」というお話があり、コーディネーターが「このような日頃の交流が、地域のつながりを深める大切な場所になるので、継続して活動してほしい」と呼びかけました。会場内には、活動で実際に作製した衣服などの作品が展示され、参加者が作品を思い思いに眺める様子が見られました。

また、会終了後に各地区の2層協議体が開催され、発表会運営の反省会や情報共有が行われました。



まちづくり短信

宮城県地域支え合い  
生活支援推進連絡会議事務局  
(宮城県社会福祉協議会)  
(2022年8~10月期)



## 3市2町の生活支援コーディネーターが情報交換会を開催 〈9月30日〉

コロナ禍で休止していた3市2町生活支援コーディネーター情報交換会が、約2年ぶりに南三陸町ベイサイドアリーナで9月30日開催されました。この情報交換会は、石巻市、東松島市、登米市、南三陸町、女川町の生活支援

コーディネーターが資質向上、連携・関係構築を目的として自主的に開催しているもの。今回は南三陸町社会福祉協議会が幹事となり、ご近所福祉クリエーターの酒井保さんを招いて、「地域包括ケアシステムと社協～巻き込み大作戦～」と題する講演会を開催しました。南三陸町社協からは生活支援員(LSA)も参加し、生活支援コーディネーターと社協職員計33人が集まりました。

講演では、生活支援体制整備事業の基礎知識や、「支え合い」の根本的な考え方、介護予防事業と生活支援体制整備事業のつながりを、生活支援コーディネーターとしてどのように理解していくかを学ぶ機会となりました。

今回は、研修会として約2時間の講演を聴くスタイルでしたが、次回は石巻市社協を幹事として、情報交換をメインに開催する予定です。

